

「ワッカ／小清水原生花園」
(常呂町、小清水町)



ワッカ原生花園は「龍宮街道」と呼ばれる日本最大の海岸草原。オホーツク海とサロマ湖に面し、春から秋には300種以上の草花が咲き誇る。車の乗り入れ規制や地元漁協による植林など先駆的な試みを展開する。小清水原生花園は一時期、花が衰退したが、1993（平成5）年より野焼きや球根の植栽、帰化植物の除去を行い、花のあふれる公園にのみがえった。濤沸湖沿いのヒオウギアヤメ群落とそこに放牧される馬の群れは特有の景観。



阿寒国立公園の原始の自然に囲まれた「神秘の湖」は世界有数の透明度と美しい乳白色の霧の風景で知られる。摩周湖には流入河川も排水河川もないが水位は一定している。その景観は、北海道の湖沼と山岳の複合景観としてもっとも代表的なもの。摩周湖および周辺環境の保全に向けた「摩周湖宣言」に集約される地域住民の取り組みは高く評価されている。

「摩周湖」(弟子屈町)

「根釧台地の格子状防風林」
(中標津町など)



中標津町、別海町、標津町、標茶町にまたがる格子状防風林は、スペースシャトルからも撮影されたように、そのスケールにおいても地球規模的な、北海道ならではの雄大なもの。幅180m、総延長643kmの林帯は、防風効果だけではなく野生生物のすみかや移動の通路としての機能も果たしている。開拓時代の殖民地区画を示す歴史的意義も持つ。



湿原景観を構成するすべての要素が一望できる学術的にも貴重な湿原。一部は「霧多布湿原泥炭地形成植物群落」として1922（大正11）年に天然記念物に指定され、数百種の高山植物が自生している。春から秋にかけて咲く花々の美しさを楽しみ、タンチョウや白鳥など百種の野鳥も観察できる。地域では湿原保全のトラスト活動が積極的に展開されている。

「霧多布湿原」(浜中町)

「螺湾（らわん）ブキ」(足寄町)



足寄町の螺湾川に沿って自生する螺湾ブキは高さ2～3mに達する巨大なフキ。かつては高さ4mに及び、その下を馬に乗って通ることができたというが、なぜ大きくなるのかは謎が多い。その味は繊細で、ミネラルが豊富で繊維質にも富む。地元では産学官が一体となった商品開発を進めており、足寄町オリジナルのブランドとして知名度を高めている。



昭和初期に十勝内陸の産業開発を目指して建設された第一級の鉄道遺産。市民と産学官が一体となった運動の結果、34橋梁が保存された。中でもタウシュベツのアーチ橋は、糠平湖の水位によりその姿を変える「幻の橋」として近年人気が高まっている。地元の担い手たちの積極的な活動は産業遺産の保全・活用モデルとして全国的に知られている。

「旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群」(上士幌町)

「石狩川」(流域48市町村)



大雪山系を源とし、上川、空知、石狩の大平野を形成して日本海に注ぐ大河川。北海道開拓の歴史の中で、度重なる洪水と闘いながらも、交通・物資輸送の道として大きな役割を担い、またサケ漁など北海道の歴史と文化が刻み込まれている母なる川。河口の石狩市では2002（平成14）年から、鮭地引網漁の技術と文化を次の世代に伝承する事業を実施している。